ニジェール支所便り

2019年4月号

【編集長】山形支所長　【編集担当】佐々木企画調査員
Tel:（227）2073 5569　Fax:（227）2073 2985　E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

☆ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html

今月のトピック

- 支所からのひとこと　～今月のニジェール短歌～
- 新シリーズ：短期出張者が見たニジェール　**竹越久美子 SHEP 専門家**
- 3月の支所の活動報告
  ～灌漑稲作振興のための農業水利整備公社（ONAHA）機能強化計画・協力準備調査　第 2 次現地調査～
  ～テッサウア・保健センター開業式典～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
  ～みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
- ニジェールにおける活動紹介
  ～ニジェールでゴミを集める日本人　第 17 話　–短期出張と暑い乾季の過ごし方～
- ニジェール国内の出来事　～ロバを襲う謎の病～

支所からのひとこと　～今月のニジェール短歌～

産声（うぶごえ）が砂に染みゆき寄り添いて
眠る二人に安らぎの歌

昨年 10-11 月号で、故谷垣先生がテッサワに遺された外科センターを保健省が引き継ぐことをお伝えしましたが、元のご自宅も住民のために活用したいと、産院付き保健所に改造され、すでに初めての新生児も誕生しました。開所式に参加した当支所現地職員の出張報告を、本文でお伝えします。

山形所長

新シリーズ： 短期出張者が見たニジェール！

新シリーズと銘打っていますが、このコーナーが始まってから早いもので、もう半年が過ぎました．．．これもニジェールを訪れた方々の温かいご支援があってのこと（ありがたやぁ～）。さて、今月のこのコーナーは、先月まで執筆頂いた中村専門員とともに何度もニジェールに足を運んでくださったSHEP専門家の**竹越久美子さん**です。今のSHEPがあるのもこのお二方のお陰です！（ありがたやぁ～）そしてなんと、またまた太っ腹な来月号も続投の確約をして頂きました（ありがたやぁ～ありがたや！）。

これまで何度かニジェールに出張し、その度にニジェールの魅力にはまり、最近は毎回ニジェール出張が楽しみな SHEP 西アフリカ広域専門家の竹越です。

このコーナー、何を書いてもいいといわれても題材がありすぎて困るのですが（笑）、「ニジェール人についてのエピソードとか・・・」と言われて思いだした小話があります。ニジェールを好きになったエピソードの一つです。

****

11 月某日、農業省の高官と面談の予定があり、約束の午前 10 時に農業省に到着。

秘書室に行くと、恰幅のいい 50 歳くらいの女性秘書さんが、もう一人の同僚の女性とおしゃべりしながらゆったりとくつろいでいた。入ってきた私たちを見て、はて何故この人たちはここにいるのだ？というきょとんとした顔をしている。

「10 時に面談があるのですが・・・」

と伝えると、秘書さんが

「（は？？？）そんなはずはないわよ」

という。

なんでも今、高官は副大臣と出張中で、副大臣をおいて帰ってくるわけがないと言い張る。

しかし、ニジェール支所のナショナルスタッフが、つい 2 時間前に、本人に電話して面談のコンファームをした際には既に出張から戻っており、「まだ家にいるがこれからオフィスに向かう」とのことだった。それを秘書に伝えると「私の耳には入っていないのに・・」と、まだ信じられない様子。秘書が高官に電話してみたのだが出てくれない。「じゃあ、来るかどうか待ってみようじゃない！」とどっちが正しいか競ってみようじゃないという言い方。まだ信じられないらしい。

しばらくして秘書さんが、支所のナショナルスタッフに「あなたの電話で高官に電話してみてよ」と伝えた。電話が鳴りだしてから秘書さんに渡すと、高官が出たらしく、秘書さんが話し始める。

「ムッシュ（＝ミスターのフランス語)、今どこにいるのですか！私の目の前にあなたとアポがあるという方々がいて、あなたが既に出張から戻ってきているというじゃないですか。私は把握していないですよ！」

秘書が高官にこういう感じで話せるなんて微笑ましい。お母さんがいい歳になった息子に、まったく心配させて！と愛情たっぷりに叱っている感じがした。

電話を切った秘書さんは隣にいた同僚に、

「ふう、まったく、何も知らせてくれないよ」

「もうまったくあの人ったら」とダメな旦那のことを話しているかのように愚痴ると、同僚は、

「仕方ないよ。彼はプル族だからね」

と。その抜群の返しに部屋全体に笑いが起きた。

私は同僚女性のつっぱねた言い方が可笑しくて笑ったのだが、支所の佐々木さんによると、プル族とザルマ族はよく「私たちの奴隷（esclave)」とからかい合うらしい。仲が良いからこそこうして言い合えるのだ。そういえばブルキナファソでも、民族同士で奴隷という言葉を使って茶化しながら友情を育んでいた。

****

上の会話は、日本語で書くと面白味が半減するのですが、フランス語では漫才のようで、とても和みました。こういうエピソードが重なると、そりゃ～ニジェールを好きになりますわ。

この時の写真がないので、私がこれまでに出会ったニジェールのエネルギッシュな素敵女性たちをまとめてみました。

３月の支所の活動紹介

【灌漑稲作振興のための農業水利整備公社（ONAHA）機能強化計画・協力準備調査　第 2 次現地調査】

前回の第 1 次協力準備調査は昨年 7 月に実施されました[1]。今回も、3 月 12 日から 3 月 20 日の日程で、畔上団長と共に三祐コンサルタントの戸嶋専門家、新井専門家、通訳の大谷さんというメンバーで酷暑のニジェールを再び訪れました。

写真１　農業省次官への表敬訪問

前回の ONAHA との協議後、さらに日本で供与機材の精査を行い、予算に見合う機材リストの最終化やニジェール政府側の負担事項、機材引き渡しまでのスケジュール案等を作成し、それらを盛り込んだ報告書案を先方政府に提示しました。初日に会見した農業省次官は、その内容に概ね合意したものの、最終的な機材の引き渡し時期を、せめて 2020 年内にできないものか、という希望を再度述べられました（写真１）。

写真２　財務省での協議風景

農業省に続いて財務省での主な協議事項は、無償供与機材に対する免税措置についてです（写真２）。今回、特に争点となったのは西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）税やアフリカ連合（AU）税といった共同体税についてでした。これについて財務省次官補の女性が懇切丁寧に説明してくれました。プロジェクトの性質上、これらの税が日本側に課せられる可能性は低いとのことでしたが、いずれにしても交換公文（E/N）内でそれが明記され、その文書に対する財務省の署名が必要となります。

週末を挟んで翌週の月曜、場所を ONAHA の会議室に移し、ミニッツ協議が始まりました（写真３）。前回同様、協議内容についての仏文を一文一文確認していきます。これは仏語圏特有のことらしいのですが、フランス語の言い回しや動詞の使い方など、細部にわたって ONAHA 側のチェックが入り、気づけば 14 時を回っていました。さすがに休憩抜き、昼食抜きの状態でこれ以上議論を続けるのは難しいということで、初日はここでお開き。

写真３　ONAHA 本部での協議風景
（丸々２日間協議を重ねました）

写真４　最終日。農業省・ONAHA・JICA 間での署名式

翌日は昼前には終えて、近くの灌漑水利区の視察もできるだろう、と甘い期待を抱いていましたが、翌日も同じ調子で議論は続き、すべての作業が終えたときは 16 時を回っていました。ただ、その甲斐あって、翌日は朝一番で再び農業省次官室を訪れ、農業省、ONAHA、JICA 間でめでたくミニッツ署名に至りました（写真４）。この晴れ晴れとした表情からも協議の充実ぶりが見て取れます。今後は、E/N 署名、G/A 締結を経て、購入機材の入札作業へと進みます。これらすべてが予定通り順調に進み、ニジェール側の望む 2020 年内の機材引き渡しが確実になるよう、支所としても引き続き後方支援してきたいと思います。調査団の皆さん、お疲れ様でした！

---

[1] 詳しくは『支所便り』2018 年 7 月号をご参照ください。
https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201807.pdf

【テッサウア・保健センター開業式典】

先月の『支所便り』でもお伝えしたとおり、テッサウアの故谷垣先生・静子夫人のご自宅が地域の保健センターへと生まれ変わりました。その記念すべき開業式典への山形支所長の出席が叶わなかったため、ナショナルスタッフのハッサンさんが今月 15 日に開催された式典に参加しました。以下は、谷垣先生と静子夫人を敬愛してやまないハッサンさんの出張報告です。

2019 年 3 月 15 日、テッサウアの複数の高官出席のもと、Mme TANIGAKI SHIZUKO と名付けられた産婦人科を含む保健センターの開業式典が行われました。テッサウアの人々は、谷垣静子夫人がこの地でニジェールの女性と子どもたちの健康のために果たした役割と、生涯にわたって夫、谷垣雄三医師を支えてきたことを称え、この保健センターを、1999 年 5 月にテッサウアの地で亡くなった静子夫人に捧げることを決めたのです。

式典に集まったテッサウア高官の方々（中央青のスーツがハッサンさん）

故人の住居が保健センターへと生まれ変わること、それはテッサウアの人々にこの保健センターが受け継がれるということが故人の 25 年間のテッサウアでの生涯、そして 36 年間のニジェールでの生涯における活動や成果を永続させ、不朽にさせることを意味しています。

式典に集まった新保健センター・スタッフ

テッサウアの町で現在唯一の保健センターは、女性や子どもたちにとって質のよい医療を受けるのを難しくしています。テッサウア地方医療センターの院長によれば、この新しい保健センターは、地元住民にとってより良い医療へのアクセスを改善する一歩となるでしょう。

故谷垣雄三医師は、彼の生涯の大半を地方の住民のために捧げてきました。彼は生前、最も脆弱な人びとのへの外科治療をできる限りアクセス可能にする努力を怠りませんでした。

谷垣雄三医師が残したこの偉大なる遺産は、この先も長く、永遠に受け継がれていくことでしょう。彼は偉大なる資質をもった類まれなる人物でした。彼はニジェール人とってだけでなく、日本人にとっても大きな空虚感を残しました。

産婦人科病棟内の診療室（赤ちゃん用の体重計も配備されています）

谷垣ご夫妻のお墓を訪れた式典参加者

谷垣雄三医師はテッサウアの人々の記憶に長く刻まれることでしょう。この保健センターでこれから生まれる新たな命は、この保健センターの敷地内で眠る谷垣雄三医師と静子夫人の安寧と安らぎをもたらすことでしょう。

(National Staff Hassane Mahaman Sani)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■■■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、**初等教育分野と中等教育分野**、二つの分野にて活動しています。**初等教育分野**においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す**『質のミニマムパッケージ』の開発と普及**に取り組み、**中等教育分野**においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する**“機能する”学校運営委員会（COGES）モデル**の**全国普及**を進めています。

「初等教育分野」では、今年度初めに実施された**「質のミニマムパッケージ」読み書き・算数**活動のファシリテーター研修を経て、今年度パイロット対象校 101 校すべてのファシリテーター研修が完了し、対象全校内児童約 13000 名の学力改善へ向けた活動開始の準備が整いました。一方、先月ファシリテーター研修を受講した 59 校では、質のミニマムパッケージ活動が一足早く各校にて開始しました。今年度の質のミニマムパッケージ活動では、従来のドリル活動に加えて、インド NGO Pratham から学んだ習熟度別活動 TaRL（Teaching at the Right Level）を融合させ、学びに繋がる児童参加型の様々な活動を組み入れています。子どもたちは授業とは違うグループ分けや活動ファシリテーター、一人一人に配られる教材とバラエティーに富む参加型活動の数々に興味津々で、瞬時にこの活動に魅了されています。遊びながら数やアルファベットを学べる活動では我先にと参加し、グループワークも互いに助け合い、競い合いながら学んでいます。ファシリテーターを務める教員やコミュニティのメンバーも初めは上手くできるか不安な様子も見せていましたが、活発に参加する児童の姿を目にするにつれ、児童との対話や活動を楽しむようになってきています。

スタートを切ったばかりのこの活動では、ファシリテーターの能力や技術の向上、より効果的な活動の選択と進行の仕方、最適なツールの活用など、まだまだ改善の余地はあり、現場では活動モニタリングやファシリテーターのメンタリング・指導がまだまだ強く求められています。しかしながら、開始 1 日、2 日の時点で予想以上に活発な活動が繰り広げられている様子は、今後の発展への期待が強く感じられます。今後も現場の状況を注視し、広い範囲での実施が可能となる、より汎用性および費用対効果の高いモデルへと精度を高められるよう取り組んでいきます。

「質のミニマムパッケージ」読み書き活動様子 - 各自短文小冊子を手に、短文を見て、聞いて、指でなぞり、そして口に出すことで「読み」を身に着けていきます

「質のミニマムパッケージ」算数活動様子 - 棒とゴムを使って一や十の位の概念を身に着けていきます。

（みんなの学校プロジェクト専門家　影山晃子）

ニジェールにおける活動紹介　～ニジェールでゴミを集める日本人　−短期出張と暑い乾季の過ごし方～

支所便り 7 月号（2016）から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第 17 話。今回は、この時期から始まる厳しい暑さについて執筆頂きました。

3 月なかばを過ぎると、ニアメでは気温が日に日に上昇するのを体感する。4 月になると、最高気温が 40℃を越えることも、ふつうになってくる。気象局が発表する最高気温は日陰で計測されており、日陰で 40℃であれば、日なたでは 45℃を越えることもふつうである。日中の暑さだけでなく、夜間に暑さで寝づらい日々がはじまる。天井扇をつけたり、扇風機をつけたりするが、どう快適に夜を過ごすのか苦労する。エアコンのあるホテルであれば、客室でエアコンをつけることもできるが、当然のように設定されている室内温度 18℃のまま寝てしまうと、起床どきに熟睡できないと感じるのは、日本の夏と同じである。

ニアメの人口は 2014 年時点で 110 万人を越え、都市は膨張しつづけている。電力の供給が需要に追いつかず、突然、停電がやって来る。照明やテレビが消え、辺りは真っ暗になる。そのため、わたしが滞在する家庭では、いつでも停電が来てもいいよう、部屋には懐中電灯がつけたままにされている。事前に通知のない計画停電で、ニアメの中心街や官庁街を見ると灯がついているのがみえる。家主いわく、「大統領官邸があるプラトー地区では、停電がないはずだ。」きっと、そうだろう。

夜間における停電への備え：ニアメ市では停電が突然、発生する。

背中のあせも

停電で扇風機やエアコンがストップすると、耐えがたい暑さが襲ってくる。ニアメの住宅は高い壁で囲まれていて、風通しが悪いし、その壁が日中に受けた熱を放ちつづけている。戸外に出て、洗面器に水を張り、椅子に座って足をつけて涼をとる。蚊が集まってくるので、うちわで蚊を払いながら、ほどよいときに蚊帳のなかに入る。横になって右手でうちわをあおぎつづけ、手が疲れたころに眠りにつき、朝を迎えることになる。こんな調子だから、滞在先の子どもの背中には、たくさんのあせもができている。

ニアメに到着すると、日本との大きな気温差で体がこたえる。体が暑さに慣れるまでには、1 週間ほどかかる。ここ数年のあいだ、わたしの滞在は 10 日ほどから 3 週間ほどの短期であるから、体が慣れた頃には日本へ帰国しなければならない。ここで、ニアメと東京の月別平均値をみてみよう（次頁）。温度差がないのは 7 月と 8 月である一方、2 月と 3 月の温度差は 20℃以上と大きいことがわかる。そして、4 月と 5 月にはニアメの平均気温が 34℃以上となる。最高気温は 40℃を越え、日本でいう猛暑日が続くのである。

ニアメと東京の月別平均値（°C）

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
ニアメ	24.0	27.2	31.5	34.3	34.4	32.0	29.4	28.1	29.4	31.1	28.5	25.2
東京	6.1	6.5	9.4	14.6	18.9	22.1	25.8	27.4	23.8	18.5	13.3	8.7
差	17.9	20.7	22.1	19.7	15.5	9.9	3.6	0.7	5.6	12.6	15.2	16.5

平成 26 年『理科年表』より。データはともに、1981 年から 2010 年までの 30 年平均値。
差は、ニアメの気温から東京の気温を引いた値。

猛暑日が続く 4 月と 5 月は、ハウサ語でラニ（暑い乾季）と呼ばれる。ニジェールで野外の仕事をしようとするなら、強烈な日射しを受けないよう、長袖を着るのがよい。わたしはいつも半袖を着てしまっているが、野外で仕事をし、3 日もすると、肌が焼け、体力がかなり奪われる。日よけ対策に帽子をかぶることはもちろんのこと、その帽子のつばは大きい方がよい。ニジェールの農村では 2 種類の帽子がある。帽子はハウサ語でフラ、マルファと呼ばれるが、農耕民がかぶる帽子は、日本の麦わら帽子のようで、素材はドームヤシ（*Hyphaene thebaica*）の繊維である。もうひとつ、フルベの牧夫がかぶる帽子がある。フルベの少年が作製している途中の写真だが、これはイネ科の草本（*Digitaria gayana*）の細い茎、数十本をよじって作製している。これは、頭への日射を完全に遮断し、しかも通気性がよいという特徴がある。頭部のすべてに帽子が接着することもない。フルベの帽子には、かならず天頂に紐がつけられており、かぶる必要がないときには肩に掛けることができるようになっている。そして、雨季のさなか、雨が降っても、縦に編まれた植物の繊維をつたって雨水はすみやかに流れ落ち、頭部が濡れるのを防いでくれる。これは全天候型の実用品で、優れものである。

2 種類の帽子：牧畜民の帽子（写真左）と農耕民の帽子（写真右）。左の帽子はつくっている途中。

フルベの牧夫は朝 9 時すぎから夕方 4 時まで、家畜をともなって放牧に出かける。この季節、畑にはトウジンビエやササゲの残渣、飼料となる草本はほとんど残っておらず、家畜が食べるものはほとんどない。暑いさなか歩きつづけ、正午ころに水場へ水を飲みに行くが、家畜は腹をすかせたままである。ゴミをまいた緑化したサイトでも、家畜の飼料となる牧草は残っていない。所有者がササゲの葉やトウジンビエの糠など餌を与えなければ、家畜が餓死することもある。

暑いさなかのウシの放牧

4 月の緑化サイト：樹木も落葉し、草も生えず、飼料となる牧草はなくなる。

牧夫は灼熱のなか喉をうるおすよう、水筒を持ち歩いている。牧童の少年が 500ml のペットボトルに水を入れて持ち歩いているときもあるし、大人が 5 リットルの容器に水を入れていることもある。この容器はエンジンオイルが入っていたプラスチック製であるが、麻袋の生地で包まれている。この麻生地に水をかけて濡らしておけば、水が蒸発するときに発生する気化熱で中の水が冷やされるのである。もちろん、冷蔵庫のように水が冷えるわけではないが、炎天下で飲むと、胃のなかに、少しだけ冷えた水が入っていくのが気持ちよい。ニジェールの野外作業では、重宝する。牧夫たちは、このプラスチック容器を「冷蔵庫」と呼んでいる。

ラニは苦しい季節である。農村では、半分以上の世帯で食料が枯渇している。多くの男たちは出稼ぎに出て村を留守にし、女たちは家を守っている。夫や息子がいつ帰ってくるのか、どれくらいの稼ぎがあるのか分からない。女たちはアドゥワの木（*Balanites aegyptiaca*）から若葉を摘み取り、乾燥させ、食いつなぐことになる。農村では、雨季とともに葬儀の件数が増えるのが、このラニである。

日本の春は、ニジェールではラニである。今年も、ニジェールに暑い乾季がやって来た。ニジェールの住民にとって、家族とともに、体調をくずさず、健康にこの暑い乾季を乗り切るのはきわめて重要である。

牧畜民の「冷蔵庫」：満タンで 5.5 リットルの水が入る。

農村社会における「さいごの食料」：アドゥワの葉は救荒食料となる。

ほんの 1 ヶ月前までは、朝もひんやりと心地よい空気でしたが、3 月に入ったとたんに忘れかけていたあの暑さが戻ってきました。これから暑さは厳しくなる一方です。さらに今年のラマダンは 5 月、猛暑期のピークにあたります。この過酷な時期にラマダンが重なるということは、命の危険にもつながりかねません。特に年配者は、長年の慣習、もしくは強い信仰心から無理をしてでも断食を続ける傾向にあり、結果、尊い命を落とすという話をよく耳にします。「日本の春は、ニジェールのラニ」。新しい生命の息吹を感じる日本とは対照的に、ニジェールは多くの命が危険に晒されます。どうか皆が健康にこの酷暑を乗り切れますように！

ニジェール国内の出来事　～ロバを襲う謎の病～

ニジェールの様々なシーンで活躍するロバ
（出典：RFI）

人びとの移動手段、荷物の運搬、深井戸からの水のくみ上げなど、ニジェールの農耕民や牧畜民の生活にとってなくてはならない家畜、ロバ。そのロバが、北部のアガデス州で大量死しているというニュースが今月始めに入ってきました。原因は、あるバクテリアによる感染症。感染力・致死率共に極めて高いため、昨年末からの流行で、すでに 4,000 頭以上が死亡したといいます。アガデス州の中でも特に被害が顕著な地域に住む牧畜民の男性は、これまでにこのような恐ろしい病は見たことも聞いたこともないと話していました。

牧畜民の間では、人への感染が懸念されていますが、これまでのところ人体への影響はないようです。ただ、ロバの大量死が与える社会的・経済的影響は計り知れません。国の統計によれば、ニジェールの農村地域で最も使われている移動手段がロバで、その数は 1500 万頭以上にも及ぶ、とのこと。近年では、隣国のナイジェリアに大量のロバが輸出され問題になりました。これはロバの皮や肉の需要が高い中国市場に向けての動きです（これを受けて、2016 年にニアメではロバの輸出や屠殺が全面的に禁止になりました）。

首都ニアメにおいても、ときに後続の車両の交通渋滞を招きながらも、根気強く現役で活躍しています。この牧歌的な風景が絶えることがないよう、ニジェール人一丸となってこの貴重な種を守っていって欲しいと思います。

（企画調査員　佐々木夕子）